



## 健診で発見された心房細動と心血管イベントリスク： 就労世代における大規模コホート研究

福間 真悟 大学院医系科学研究科 医学分野 疫学・疾病制御学 教授

心房細動（AF）は脳梗塞や心不全の重要な危険因子として知られていますが、無症候のまま経過することも多く、一般集団における発見の意義については十分に明らかではありませんでした。本研究では、日本の就労世代に対して広く実施されている年1回の健康診断に着目し、健診で新たに発見されたAFの頻度と、その後の心血管イベントとの関連を明らかにしました。

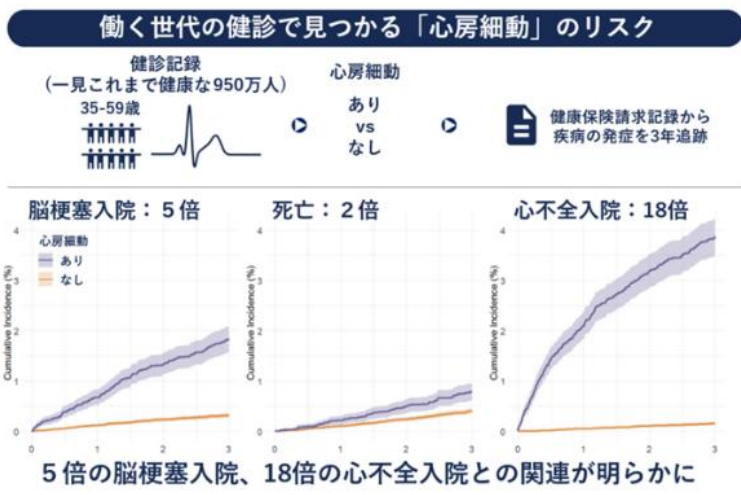
本研究は、全国協会けんぽの健診データとレセプトデータを統合した大規模データベースを用いた後ろ向きコホート研究です。35～59歳の健診を受診した約950万人を対象とした解析の結果、AFは約2400回の心電図検査に1例の割合で発見されました。さらに、AFを指摘された方は、指摘されなかった方と比較して、3年以内の脳梗塞発症リスクが約5倍、心不全入院リスクが約18倍と有意に高いことが示されました。一方で、絶対リスクとしては、脳梗塞は3年間で約2%程度の発生であり、若年～中年層ではイベント発生率自体は高くないことも確認されました。

本研究の意義は、これまで十分なエビデンスがなかった就労世代において、無症候のAFであっても将来の心血管イベントと強く関連することを明らかにした点にあります。これまでAFのスクリーニングは主に高齢者を対象に議論されてきましたが、本研究の結果は、就労世代においてもAFが重要なリスクシグナルとなり得ることを示唆しています。また、日本の健診制度という特徴的なリアルワールドデータを活用することで、疫学研究から臨床・予防医療への応用につながる知見を提供した点も重要です。

一方で、すべての人を対象とした一律のスクリーニングが有効かどうかについては、費用対効果や過剰診断

の観点から慎重な検討が必要です。今後は、リスク層別化に基づいた効率的なスクリーニング戦略や、AF発見後の最適な介入方法の確立が求められます。

本研究は、健診で得られる情報を単なる測定にとどめず、その後の疾病予防や医療介入へとつなげていく「データ駆動型ヘルスシステム」の重要性を示しています。この枠組みは心房細動の問題だけでなく、他の健康課題にも応用可能です。多様な専門分野の先生方との連携により、データを基盤とした新たなヘルスシステムの社会実装を推進していきたいと考えています。よろしくお願いたします。



### 【論文情報】

掲載誌：Circulation.

論文タイトル：Screening-Detected Atrial Fibrillation and Cardiovascular Outcomes in Working-Age Adults

著者名：Yuichiro Mori, Mitsuaki Sawano, Shun Kohsaka, Yusuke Tsugawa, Motoko Yanagita, Shingo Fukuma\* (\*責任著者)

DOI 番号：10.1161/CIRCULATIONAHA.125.074433